

2 特殊音節(促音、撥音など)の読み書きの習得が難しい

小学校の入門期でつまずきが多いのが、促音(「っ」)や撥音(「きゃ」)などの特殊音節の表記です。特殊音節は他のかな文字と違い音と文字とが一對一に対応しないため、頭の中で音の操作をすることが困難な子どもにとっては習得が難しくなると考えられます。例えば、「きって」のような促音が入る場合は発音しない音「っ」に気付かせることが指導のポイントになります。拗音では2音から1音になる仕組みを理解させることがポイントです。このことに着目して指導・支援を行うモデルとして開発されたのが「多層指導モデルMIM」です。MIMでは音の特徴を目に見える形で表した「視覚化」や「動作化」で音と文字表記とを結びつける指導を行います。近年、自治体によっては小学校の通常の学級全校で取り組んでいる例もありますので、詳しくは以下を参照していただければと思います。
<http://mswwres.meijiigakuin.ac.jp/~kaizu/mim/>

3 似た形のひらがなや漢字の誤用が目立つ

例えば、「さ」と「き」、「月」と「日」などの誤用が多い場合です。文字の細かい部分の違いに注意を向けることができないために、このような間違いが多くなります。この場合には、似た形の文字を比べてどこが違っているのかを見つけ、違いを意識して書く練習をしたり、ノートで間違った文字を書いたら、その間違った箇所だけを赤字で修正して示し、間違いに気付かせたりするとよいでしょう。二つの絵を見比べて間違い探しをするゲームなども、視覚的注意を高める上で有益かもしれません。

4 漢字の形にイメージをもたせると思い出すことができるが、一度覚えた漢字が定着しない

ノートを見ると、習ったときは書けた漢字を使わず、かな文字ばかりで書いていることが多くあります。記憶があいまいなので、ついかなに頼ってしまい、使わないのでますます定着していかないという悪循環に陥ってしまっているのです。

漢字は表意文字ですから、一文字ずつに意味があります。「木」、「林」、「森」や「川」などの象形文字からきている漢字の場合は、絵と結びつけてイメージを記憶する方法をとるなど、記憶を検索する手がかりを与えるのがよいでしょう。

また、漢字は「へん」と「つくり」を組み合わせて成り立っていますから、漢字を「へん」や「つくり」の部品に分けて提示し、書く練習をするといった方法はよく行われています。また、「親」という漢字は「立」、「木」、「見」という漢字を組み合わせていますので、「たつのしたにき、みぎにみる」と口に出して唱えながら言葉と結びつけながら記憶する方法もあります。通常の学級の一斉指導の場面のように、個別に指導することが難しい場面では、ノートに既習漢字の一覧表を貼り付けておいて、書く文字に迷ったら、その一覧表を見て書いてよいと約束しておく支援方法もあるでしょう。

上記のように書字の困難にも様々な要因が考えられますので、日頃の書字の状態を観察して、個別に支援方法を工夫していくことが大切となります。

参考文献

海津亜希子, 杉本陽子「多層指導モデルMIM アセスメントと連動した効果的な「読み」の指導—つまずきのある「読み」を流暢に」(学研教育ジャーナル選書) 2016



<プロフィール>

河村 久(かわむら ひさし) 聖徳大学 教育学部教育学科長・教授

私は、現職に就く前には東京都の公立学校の教員、小学校長・幼稚園長として、主として障害のある子供の教育に従事してきました。

この間、全国特別支援学級設置学校長協会会長(平成19年度)、中央教育審議会専門委員(平成18年度～平成23年度)等を歴任しました。近年は、特別支援学校の学校運営のお手伝いをするとともに、通常の学級に在籍する発達障害のある子供の教育に関する研究や現職の先生方への支援にかかわることが多くなってきました。

本研究所の活動に参画することによって、生きにくさを感じている子供たちの発達支援と生活の充実のためにお役に立つことができたら、大変幸せなことと思っております。